

風狂

第4,9号

風狂の会

詩

死せる母

長尾 雅樹

諺辞典（三）

なべくら ますみ

卓袱台 ——Hのために——

原 詩夏至

ヒョースベよ

富永 たか子

ニッポン誕生

出雲 筑三

老詩人

高 裕香

真の抵抗

高村 昌憲

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十三）

三浦 逸雄

エッセイ

五島雄一郎『音楽夜話』から

神宮 清志

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十五）

高村 昌憲 訳

執筆者のプロフィール

読者からのコメント

渦巻く黒い闇
黒い波は空間を分割して
母は黒い布で包んだ
赤ん坊を抱いている凶柄だ
母の手は硬直して布を押え
死相を現わして息絶えた女の顔の無情
遙かな時間を遡る思い出の輪廻を追う
記憶は薄れて絵図は厳格に迷っている
懐かしい母の胸は暗い揺り籠の気配
死の事実は二度と存在することのない
空白の魂を何処までも飛翔させる
何があったのかではない
何を掴み取るかなのだと
死の形相を瞼の裏に縫合された
幼児の脳裡はふくよかに安住を尋ねる
思慕の情は悲しみに狂燥される
母の死は氷室に埋めてしまおうと
欠落の血脈を辿って追憶の扉を押すが
感性の断片は甘え心を静かに突き放す
決して忘れてはならないと思い返して
母の面影をひたすら滑空しては綻びを解く
生涯唯一の肉親の欠損をこそ
絵心のままに苦痛の深度を計りながら
描きつくした板絵の中に記念の墓はある
生きていることがあんなにも当然の日々が
瓦解した後の苦悶の閲歴は
血路を凍らせて偶像を捨てさせる
情念を込めて描く一枚一枚の涙の陰画
割れんばかりの感情の襷を押し殺して
悪食人は死せる母に抱かれて眠る幼児なのだ

◎ 蛇の道は蛇

目の端を動いて行くのは
何か

歩きながら顔を向けると
草叢を求めるように
緩やかな一線を引いて行く薄黒い線

流れに逆らうことは出来ない
引っ張り廻される理不尽より
その先のちょっとした優越感さえ予感して
この見え透いた我が道を
少しずつを見越して
注意を向ける

早足で歩く男も気を取られ覗き込む
青大将だね

ああ やっぱり

簡単な一言ですべてが見えた
まだ若そうな
青大将が
草深いその先へ突き進もうとしている
一直線に
浅い水が小さな渦を作る

草叢には既に幾匹もの
蛇たちが通り過ぎて行ったのだ
同じような野望を抱えた

末路から
抜け出せないことを知らずに

その日

おまえがひっくり返した卓袱台の
今は畳の上に散乱した
飯と魚肉とみそ汁と
そして家庭。

かつて

おまえがひっくり返そうとしたのは
間違いなく
そんなものではなかった筈なのに。

もはや決して目を合わせず

硬い顔で

散乱した飯と魚肉とみそ汁と
そして家庭の轢死体を
片づけもせず見つめる
おまえの妻。

だって屍肉を今更どうするのか

それとも

拾い集めて 繋ぎ合わせて

百万ボルトの電流を流せば

飯と魚肉とみそ汁と

そして家庭のフランケンシュタインが

むっくり起き上がるとでも

――畳から？

仕方がないので

幼い子供たちは

畳に手をつき 顔を近づけ

魚肉と飯とみそ汁と

そして家庭の搔爬された水子を

そのまま舐め始める

したした と。

その傍らでは
卓袱台が
まだ
四つの脚を呆然と突き上げ
もう自力では決して起き上がれぬ
亀のように
〈世界〉の裏面を晒している
——無防備に。

散歩に凝る
速歩ほど早くなく
ぶらぶら歩きほど遅くはなくて
相模の国をひと周り

木偶とみたのは道標だった
黄昏に浮いてあやうげな掠れ文字
右へ...
左へ...
こんな風に打ち棄てられた河原
此処は
不浄を浄化する聖域だ
彼岸と此岸の分けどころ
地図にも示さずうずくまり たかまり合って
遊興の名残り舞台に踊り続ける影法師

散歩はいいものだ
ヒヨースベよ
ヒヨースベよ
呼びながら歩くと
丹沢を背に
空の河原を立ち泳ぎしてくる
遠来の客人
混沌を混沌と背負い込んで
三拍子の足取りで巡る
すっぴんぴんの蒼い貌

行こうかヒヨースベよ
戻ろうかヒヨースベよ

おまえを連れて夏を渡ろう

*ヒョースベ＝河童の別名

そうな...千五百万年前なんじゃ
地面が割れて日本海ができたのだが
しかし朝鮮とは陸続きだったのじゃ

北海道は樺太シベリアと陸続きじゃった
だが津軽海峡はあったのじゃ
二つのニッポンはどこも陸続きだったのじゃ

恐竜もマンモスも悠々と歩いてきた
進化したホモサピエンスもきた
ニッポンはどこも南極みたいだったのじゃ

地球は生きているのじゃ
当時は寒冷周期だったが
これからは熱くなる頃だろう

誰が決めたんじゃろう
四百年毎に恐ろしい大雨が降る※
登呂で降った三千ミリは千七百八年じゃった

大丈夫かのう
みんなで冷房使ってるが
地球は呼吸しとるんじゃ

風邪でもひかなきゃいいがのう
そろそろ
くしゃみが 出そうじゃがのう

※気象庁 過去二千年間の記録より

連れ合いも天国に行き孤独な日々
頼れるのは、杖一本ともう一人の僕
そして、時折夢に出る妻の声

目覚めもまちまちだが、必ず朝の散歩に出る。
まぶしすぎる朝日に感謝を込めて「おはよう！」
空も花も鳥も出会うものには、みな「おはよう！」

見知らぬ人にも「おはよう！」
子供も若者も老女にも「おはよう！」
危なげな私に「おはようございます！」と返事。

ベンチに座りもう一人の僕と詩を編む。
美しい、愛のある言葉を宝のように探す。
言葉に出ないときは、独り黙って涙を流す。

梅雨明けの青い空を見ていると
誰の言うことも聞くまいと思う
誰からも自由でいたいと思うと
自らの権力は無くて良いと思う

ところが不正を目にすると忽ち
怒りと共に思い出す自らの権利
正義という観念が所有する土地
そこの看板が表す処に情熱あり

情熱が正義では子供じみている
情熱は不正の温床でもあるのに
何時の間にか正義の仮面を被る
情熱の暴君が喜ぶのは強制の鬼

正義が力で抵抗すれば曖昧な儘
精神も思想も発見されないのだ
論拠と証明で権利が確立する今
真の抵抗を担うのは思想の筈だ

武器を持っても怖がる人もいる
真の抵抗は信念と勇気を持って
語ることであり書くことである
精神への最初の叫び声を越えて……



三浦逸雄「裸婦」8号（アクリル 紙）

五島雄一郎という方は東海大学の医学部教授にして、附属病院院長であった。その五島氏はクラシック音楽に造詣が深く、お馴染みの作曲家たちがいかに病気に苦しめられていたかを、医者立場から書いたのが『音楽夜話』である。この本が講談社から発行されたのは一九八五年のことで、初めて読んだときはいかに彼ら作曲家たちが重病に苦しみ、肉体的精神的に病んでいたかを知って、驚きもしたし感動したものだ。そしてかなり病弱だった自分がそれほどでもないを知って、勇気づけられ自信が湧いてきたりした。今年この本を再度読み返して、改めてその内容のすごさに感動し、前回気付かなかったところも多々あり、ぜひ記録したくなった。

数ある作曲家たちのなかで健康と言えるのはハイドン、ワグナー、ヨハン・シュトラウスくらいのもので、ほかはひどい病気もちばかりである。健康な人はその作品によく表れており、明るく、軽やかで、陰気なところがない。ワグナーは健康であるばかりでなく、絶大の体力に恵まれたひとだったことがその作風によく表れている。

天才作曲家たちが罹患した病気でもっとも多いのは梅毒で、ベートーヴェン、シューベルト、ドニゼッティ、シューマン、スメタナほかである。ベートーヴェンは先天性梅毒から聴覚障害を患い、精神的抑圧からくる過敏大腸性症候群による慢性下痢に生涯苦しんだ。その悩みを忘れようとワインを多量に飲み、肝硬変に罹り五六歳で死亡した。ベートーヴェンの音楽には、梅毒患者特有の並外れたしつこさと集中性がある。精神的にも病んでいて、偏見と被害妄想をもち、猜疑心の強い性格から家主と喧嘩し、友人とも喧嘩して、七九回も引っ越しをしている。

シューベルトは二三歳のとき小間使いから梅毒をうつされ、その後うつ病に悩み、梅毒性脳血管障害により三一歳の若さでこの世を去った。その伝えられている人柄といい、「アヴェマリア」「セレナーデ」などの曲といい、清純そのもののようなイメージをもつシューベルトが梅毒、それも小間使いからの罹患と聞くと、幻滅する人も少なくないだろう。

ドニゼッティは脳梅毒から強度のうつ病となり、精神病院に入院している。「ルチア」「愛の妙薬」のような後世に残るオペラの傑作を作り、常に演奏旅行をしながら、一年間に五つものオペラを作曲するという超天才ぶりを発揮しているが、これも脳梅毒のなせる創作力の亢進だった。麻痺性発作から精神錯乱状態のうちに死亡という悲惨極まりない五一年の生涯だった。

シューマンもまた脳梅毒から精神に異常をきたし、ライン河に投身自殺を図り、精神病院へ入院して最期を迎えている。ピアノ曲集「子供の情景」は二八歳の時のクララとの結婚前の希望に満ちたときの作品である。その後「女の愛と生涯」「二人の擲弾兵」と傑作を作るがそのあたりから、しだいに病状が悪化し、神経衰弱、聴力障害、めまい、幻聴にいつも襲われ、梅毒性脳疾患にもとづく精神障害により四六歳で死亡した。

スメタナは梅毒から聴覚障害を起こし、有名な曲の大半はほとんど全聾となってから作曲

されたものだった。チェコスロバキアの国民的作曲家であり「モルダウ」のような複雑にして急調の曲を、全聾にして作曲したとは不思議な気さえしてくる。耳鳴り、平衡障害に悩みつつ麻痺性発作から精神錯乱状態のうちに六〇年の生涯を閉じた。

梅毒は恐ろしい病であり、今ではかなり少なくなっている。ただしこの病気は、不思議な作用があって芸術家に多大な恩恵をもたらしたという面も否定できない。梅毒が進行して脳梅毒に進みつつあるときに、憑かれたように創作能力が亢進する現象があり、ほとんどの作曲家がその時期に優れた傑作を残している。靈感が訪れたごとくにとんでもない多作となり、スメタナ、シューマンなどにこの傾向が著しい。音楽家以外でも、哲学者ニーチェ、作家のモーパッサンなどが同じ病をもち、同じ高揚期をもっている。

梅毒に次いで多いのが肺結核で、ショパン、ウェーバーが代表的だ。三九歳で亡くなっているショパンの哀切にして甘美な音楽には、肺病患者特有のものがあると思えてならない。日本の作家で肺病を患っている者には太宰治、堀辰雄ほか大勢いるが、傾向として似ていると思う。「苦しいときに苦しい顔をしてはならない」これはショパンの言葉として強い印象と共に長く記憶してきた。しばしばこの言葉を思い出して実行しようとさえした。この言葉の背景には、常に外国の支配を受けてきた祖国ポーランドの厳しい現実があったと思う。

ウェーバーが肺病とは意外な感もあるが、もっと意外なのは先天性股関節脱臼のため生涯歩行困難だったということである。勇壮にして明るい「魔弾の射手」「舞踏への勧誘」の作者が車椅子生活で結核性の咳を絶えずしながら四〇歳でこの世を去っているとは信じがたい。

憂さを忘れようと深酒に溺れる者とヘビースモーカーも多い。ムソルグスキーはアルコール依存症から中毒となり一命を落としている。変わったところではバルトークが白血病、ベルリオースは持病の腸神経病に悩み、アヘンを常用して中毒から全身衰弱をきたし、精神錯乱を起こして最期を迎えた。「ボレロ」を作曲したラベルは若年性アルツハイマー型認知症に罹り六二歳で亡くなっている。

メンデルスゾーンといえ、ひたすら明るく幸福を予感させるような曲を残しているが、風邪をひきやすく、耳管カタルと難聴を患い、神経過敏で短気、厭世、頭痛、仕事を放りだしたい気分、私生活に閉じこもりたい傾向をもち、三八歳の若さで脳卒中を起こして死亡した。

ヴェルディは子供の頃から慢性扁桃腺炎があり、頭痛や神経性胃炎およびリウマチにも悩まされ、強度のうつ病もあった。死ぬまでワインを飲み葉巻を吸っていた。そんな中で「椿姫」「アイダ」「リゴレット」等数々の傑作オペラを作り続けていたことを想うと肅然とさせられる。

シベリウスはフィンランドの国民的作曲家であり、九〇歳を超える長命で尊敬を一身に集め、国家から多額の年金を支給されていた。しかし北欧の芸術家の多くがそうであるように、深刻なうつ病に悩まされ続けた。ノルウェーの画家ムンク、スウェーデンの作家ストリンドベリのように。

フランス印象派のドビュッシーは、趣味は高尚で服装はダンディズムの極致ではあったが

、貧しい階級に生まれ辛苦して成長したために、複雑で打ち解けない性格、ひどく無口だった。強度の分裂質で、五六歳の時に直腸癌で死亡。「亜麻色の髪の乙女」「月の光」「牧神の午後への前奏曲」のもっている謎めいた奥深さはそうした背景があるのだろうか。

こうした病気に苦しんだ作曲家の実態には、今回読んでみて改めて驚かされたが、それ以外に気付いたところもあった。その一つにハイドンとモーツァルトの妻が音楽史上名高い悪妻だったという。ハイドンについては具体的にどうだったのかははっきり分らないが、モーツァルトの妻コンスタンツェは、浪費癖があり浮気だったという記載がある。客観的には確かに悪妻の名に値するとは思いますが、どうもそうとばかり言えないような気がする。

コンスタンツェは金遣いの荒い軽薄な浮気娘だったというけれど、こういう女は魅力的なものである。モーツァルトは大いに魅せられていて、その傍に居られることをこの上ない幸せとっていた。モーツァルトの父はモーツァルトに天才教育を施し、息子の売り出しに全力を投じてきたが、その父親からの支配を断固拒否し、恋愛結婚を成就させたのもコンスタンツェの存在あってのことだった。それ以後のモーツァルトは呼吸するように次々と作曲し、名曲を世に送り出した。まさにモーツァルトにとってエスプリの元であり、生きる喜びだったに違いない。とすればコンスタンツェは悪妻どころか、われわれからすれば感謝すべき存在だったのではないだろうか。

そのモーツァルトは一五〇センチの小男で後年は肥満、お世辞にも好男子とは言えない。結節性紅斑症、腸チフス、関節リウマチ、鼻アレルギーと多病で、三六歳で死亡するという短命だった。サリエリによる毒殺という説もあるが、リウマチ熱から心臓弁膜症を起こして死んだと考えられている。

ブラームスはハンブルグの貧民窟で生まれ育ち、一〇歳のときからバー、料理屋、ダンスホールなどで演奏をした。こうした幼少期は彼の心に傷跡を残し、良家の子女と生涯うちとけることが出来ず、売春婦としか関係しなかった。生涯独身ではあったが、シューマンの妻クララに恋した話は有名である。貧困育ちにありがちなことだが、洋服を買うのが大嫌いで、たいへんむさくるしい外見で過ごし、経済的に恵まれたのちでも安食堂で食事をしてきた。ブラームスは歳を取るほどに気難しい皮肉屋になり、我が強く、高圧的で、異常に神経が過敏で短気であった。六四歳のとき肝臓がんで死亡した。

極貧育ちのわたしにはこの気持ちが痛いほどよく解り、ブラームスの音楽には特別に愛着を覚える。交響曲第四番の溜息をつくような主題にはしびれる。貧困育ちというのは哀れなもので、菊田一夫は金に困らなくなっからラーメンばかり食べていたし、浮浪児育ちの野坂昭如も街をうろついて、一番汚い安食堂に入ると落ち着くことが出来たという。その点はわたしもまったく同様である。

チャイコフスキーは躁うつ病でヘビースモーカーにして大酒飲みだった。また彼は当時絶対悪とされていた同性愛者であり、名誉裁判の結果自殺に追い込まれている。同性愛、自殺ともに宗教上の大罪とされ、長年伏せられてきたが、二〇世紀半ばに明るみに出された。チャイコフスキーの音楽にある悲劇性と美しさには、このことと関係が深いと思う。わたしは若いころ仕事上ジャズミュージシャンと接触する機会が多かったが、彼らは世間で想像する

以上にホモが多かった。ホモのミュージシャンの演奏には特徴があって、甘く、センチメンタルで、人の心に食い込んでくるようなところがあった。それはチャイコフスキーの音楽全体にも言えるように思う。

イタリアのミラノ「スカラ座」にプッチーニの胸像が飾ってある。「ラ・ボエーム」「トスカ」「蝶々夫人」の作者に相応しく、堂々たる風格で巨匠らしい威厳を見せている。プッチーニはたいへんお洒落で、歳を取るにつれていっそうハンサムになり、優雅な態度で女性にたいそうもてた。「わたしは魅力的な女性を追う狩人だ」と称したという。彼のオペラの中のマノン、トスカ、ミミ、マダムバタフライ...といった女主人公たちは、次から次へと渡り歩いた女性像を描いたものであったのだろうか。また不安神経症に苦しみ、ヘビースモーカーであった故に咽頭癌に罹り六六歳で死亡している。

いっぽうブルックナーは肥満で容貌は好印象を与えず、喋り方が下手で、服装はひどくみすぼらしく見劣りがした。ウィーンの音楽社交界では「お人好しのうすばか」「非文明人」などと仇名を付けられた。中年以後強迫神経症に罹り、精神病院で治療を受け、その後うつ病に罹り、気分の不安定、心配性、極端な自信の欠乏が生涯続いた。生涯独身だったが、四〇歳を過ぎてから一七歳から一八歳の娘に何回も恋をし、彼の同年配の父親から断られ続けた。六八歳のときも一八歳の娘に結婚を申し込んで断られている。七一歳になって肺炎で亡くなると、その葬式に有名人は誰も参列しなかったという。その人気のなさには気の毒とさえ思えてくる。

ひとは見かけによって判断されるというが、たしかに容貌と服装から受ける印象によって全く違った評価を受けるようだ。プッチーニとブルックナーはあまりに典型的で極端ではあるが、肝心なものをわれわれに伝えているように思える。男も女も服装その他には気を遣い、髪を整え、化粧にはそれなりに心を砕くということが大切ではないかと思う。と同時に内面にも栄養を与えることによって、それが人間関係を高め、歳を取るにつれて風貌にも味が出て来るのではないだろうか。いい人間関係を築くということが人生を豊かにし、最高の財産となるはずである。そうした努力を放棄してしまうと、単なる薄汚い年寄りになるだけではないだろうか。

われわれをこの上なく楽しませてくれるばかりか、生きる勇気をも与えてくれるクラシック音楽、その作曲家たちがいかに苦しい病と闘いながら創作に励んできたかを知ると改めて感動する。そして医学の進歩というものがいかに現代のわれわれを健康にし、幸せにしてきたかを改めて痛感させてくれる。この天才たちは命の危険と常に向き合って、その緊張感からあの名曲の数々が生み出されていることは間違いのないと思える。明日をも知れぬ命に追い立てられ、創作に打ち込むとき、命の燃焼は限度を超えて神がかりの力を発揮する。それは魂の叫びであり、命の訴えであった。われわれはそれを受けて胸を震わせるほどの感動をすることが出来るのであろう。(了)

第十二章

私は休暇のことは殆ど話しません。シートの中で眠らずに十七ヶ月が過ぎた後で、私は一回目の休暇を取得しました。そして初日はジャン・ヴァルジャンが司祭の家でした様に、服を着た儘ベッドで眠りました。精神も肉体と同様に野性の儘でした。幸いなことに私は、手薄になったパリのことは何も知りませんでした。悲嘆に暮れて平和を願っていた人々しか見ませんでした。私が出発の時に抱いた予想は全てが台無しになったと言えます。戦場での仕事が、唯一私を戦争から慰めてくれることが出来ました。それ以外の行動は、私には殆どが絶望に極めて近いものでした。そして私は暴動を起こした市民の話を書きたくありません。その様な暴動の思想には絆がありませんし、規律も無く、制度もありません。私は決して暴動を愛しません。その反対に、私には戦争の困難と危険においては寧ろ平等の気質があります。想像力は現実によって自らの限界を見出しました。

その年の春はジュピターが多くの雷を鳴らしましたし、神のこの雷鳴は滑稽の様にも見えました。我が軍の電線の一本を燃やした一撃や、部署の中の小さな電氣的爆発を私は思い出しています。それは誰も動揺させませんでした。少なくとも私は溶けた安全用のシューズを二十個程取り替えなければなりません。私はこれらの雷雨を喜んで思い出しております。砲兵隊は一瞬じっと動かずにいます。私は不気味な地域を越えるために、少なくとも一度はこれらの暗黒の雷雨の一つを利用しました。私は単に休息に行ったのか休暇を過ごしに行ったのか、私には最早分かりません。その危険地域を私は見ました。閃光が太い枝を取り除いていた音の良く響いた森を、私は毎日眼にしていました。悲劇の物語も眼にしました。殆ど毎日、人間が殺された道も同様に眼にしました。多分、人々がこの夜を去る時は勇者にはなり得ません。それ故に或る日、私は砲火と夕立の下に忍び込みました。大空の騒音が私から他の音を聞くのを妨げてくれました。私は何時も見られていないことを確信しました。栄光無きこれらの出発は、私に待つ恐怖とは異なる逃げる恐怖を経験させました。逃げることにおける不決断は殆どが恐怖そのものです。何故なら避難所が不足していなくても、標識で示されることさえもないからです。しかし、そこから出発することよりも屢々穴の中で飛び上がらない方が簡単です。そして私はその場合に、困難な行動に伴う興奮を決して感じませんでした。それは辛い時でした。

しかしながら最悪なことは恐らく、私の帰還の一つにありました。私は補給用馬車の幕の下に居りました。その日の夜は揺れて騒々しいものでした。御者は酒浸りになっていましたけれども、怖がっていました。馬たちも怖がっていました。暗黒の幕の下で、私は砲弾のひゅるひゅるという音と爆発した音を聞きました。幕の隙間から恐ろしい映像を見ました。その時に馬車から飛び降りて徒歩で道を行けば不幸になります。私は自分を全員の英雄とは感じていませんでした。信者たちが祈りを上げる様に、私はデカルトへの賛辞に専念して、次々にありきたりのことを書きました。それは『精神と情熱とに関する八十一章』の中にありますし、私には気に入っています。私はそこで再び火薬の匂いを嗅ぎますが、最早怖くありません。こうして岩壁の下の避難所に戻って、湯気が立つスープを再び眼にした時は何て幸せでしょう。そこは私の家でした。私

は砲弾の音を聞き分けて、危険でないかを把握する術を知りました。そして、それは電話線を繋いで伝言やその種のことを何時も届けるためのものでもありました。

私は斧を持たされました。退却の時には電話機を破壊する命令を受けていました。私はこの斧を見た時、捕虜になった時のことを考えました。何故なら少しは圧力がある敵の攻撃があれば、予め五百メートル以上を計算に入れて動くことが出来たからです。そして私は畏に捕らえられたとしても、敵はそこから何も獲得しなかったでしょう。敵の穴へ前進することに関心があったのは私たちですが、そこに到達することは出来ませんでした。しかしながら斧への考えは、私には考え深いものでした。私はスプレーや毒ガス・マスクや次亜硫酸塩のビンも同様に好きではありませんでした。〈次亜硫酸塩〉と自然にすっかり名の付いた伍長が、我々の防御施設を屢々調べました。私たちが毒ガスを食らったのは一回だけでしたが、私たちの背後の緑がかかったテーブル・クロスや、下の階に漂っていました。全員が毒ガス・マスクを付けていましたが、私は素顔の儘であることが出来ましたし、電話機のことにも答えることが出来ました。辛うじて桃の花の様な匂いの波があった様に私には思われます。不気味なそれらの考えは、避けることはもっと難しいものでした。その時に電話を細かく調べなければならないこと、外部へ全て置いて広げること、そしてそれらの損傷を探すことはどんなに幸いなことだったでしょう。全ての装置が医師の診断の様に、私の処に持って来られて、私はゴンティエと同様に自分の声を聞いたのです。それでもまだ言い足りないです。経験はその様な探求において何も導くことが出来ません。どんな電話も主要な同一の装置と同一の電気のスィッチを持っていますが、無数の方法で使います。そして、少なくとも二ヶ所か三ヶ所の故障を持っていることも知らなければなりません。私は、それを自分の仕事にしていたメアナの助けでこれらの探求を行いましたし、彼は旅芸人として全てを行う術を知っていました。彼は全ての喜劇役者に共通している少々気取った礼儀正しさを身につけていましたし、職業によって動作と音声を規制したばかりです。彼は指が器用でしたし、耳は敏感でした。私としては〈常識〉を学びましたし、それが大変に良い道具であることを知りました。これらの探求は不気味な観念を消してくれました。同様に無線技師助手として時々、一人のチロル地方の人が私たちに加わりました。彼はそれをやることしか知りませんでした。腕と手の位置までも学んでいたのも、写真家の様に細かく私たちを調整して大変良く知っていました。勿論、今まで以上に役に立ちました。

飛行機による調整も又、私たちを忙殺しました。しかしながら、それは殆ど何時も約束事でしたし、私は待つことの困難を経験しました。私はフォルテユネと共に標識へ行きました。そして私がフォルテユネの部下たちと、部下たちのための未来の計画を知ったのはそこであり、そのことについて私は相談されましたが、彼は正しかったのです。彼はあらゆることで自分のことには無知で忘れっぽい人間でしかなく、何ものでもありませんでした。私はこれらの対談によって尊敬されました。しかし、その場所は危険でした。そこは穴が少しも無くて短く刈られた芝生でしたが、結局のところは白い標識で飛行機を呼ぶには最適な敷地でした。しかしながら飛行機は来ませんでした。第二一〇砲兵中隊の人々は、近隣の船舶用の大砲を狙って発砲していました。私たちは巨大な底がごうごうと唸っているのを聞いていました。それは恐ろしい音でしたし、至る所から来ている様です。フォルテユネは言いました、「私は古いナイチンゲールだから、私を信じなさい。私たちにはここは側面よりも悪くないのです」。その時は、知らせのあった飛行機を空しく待ちながら、私たちは時間にして三時間も座った儘でいました。フォルテユネの部下たち

はその様にして教育され、導かれ、案内されて、初めの頃以上に高められました。しかしながら私たちにとっての状況は最良になりませんでした。しかし、単純な人間が自分を越えて考えるのは如何なる様相なのでしょう。私たちは、牽制攻撃で私たちの電話避難所の上空に達した砲弾が炸裂したのを二、三回見ました。私たちがこの光景を見たのは横からでした。炸裂の前には照明弾の小さな煙が曲線を描いているのが見えました。砲弾を見ている気がしました。穴の中から見える所にいた人々は、全員がその度に潜り込みました。この奇妙な光景の後で、私たちは対談を再び続けました。友情による勇気と呼ばれなければならない模倣による勇気は、際限の無いものです。しかし、恐らく大きな危険によって私たちが駆け回ることはありません。勿論、恐怖心はしるしで判断します。それなのに、やる事が無い時の無為による恐怖心が最も怖いものなのです。（完）

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずもつくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

高 裕香（こうゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPST A指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐうきよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむらまさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（パブー）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

富永 たか子（とみながたかこ）

一九三四年 福岡県柳川市生

日本ペンクラブ・日本現代詩人会・横浜詩人会各会員

「回遊」「めびうすの輪」「相模原詩人クラブ」に所属

既刊詩集①『シルクハットをかぶった河童』（第二四回横浜詩人会賞受賞）

② 『月が歩く』

詩人北原白秋と同郷。幼児教育に携わり、詩に親しんできた。相模原詩人クラブ主宰。三十五年間詩誌「ひばり野」を年一回発刊し現在に到る。「風狂の会」にて多くを学び席をおく。

長尾 雅樹（ながおまさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

会議という名の無責任構造：戦後民主主義が根付かなかった要因として、「会議体という無責任構造」と「成り行き任せの体質」をあげ、詳しく知ることが出来ました。難しいけれど、民主主義が根付くようになるといいですね。

三浦逸雄の世界（三十二）「犬のいる家」：犬は家族の一員になっていて、人を癒し愛らしいものですね。犬は希望のようにも見えました。

死んだ男：死者を思考することは、生者がより良く生きる方法でもあります。墓前に花を供えることから農業が生まれたという説は有力であり、新しいものが生まれるかも知れません。

飯盛女：飯盛女のことを知りました。貧しい家族のために、血を吐くほどに稼いだ金は借金に吸い取られたという辛い時代があったことを。

諺辞典（二）：鹿を馬と鹿を馬と言い張る人がいて困ったものですね。馬鹿の字もいろいろですね。やっぱりバカヤローはカタカナに限りますね。面白く拝読しました。

勇気ある者へ：見ることは見るのを望む、強い意志、判断力にもつながる。本当の危険を正しく判断する勇気を持ちたいと思いました。

7月プール開き：猛暑の中、小学校のプールから歓声が聞こえて来ます。この夏はあまりの暑さに中止するところも出て異常ですね。半世紀前の大阪の小学校の校庭プールの、宝ものだった様子が目に見えるようです。

津和野へ：萩から津和野へのバスのひとり旅、よかったですね。のどかな田舎のバスの光景が、おばあさんの姿を通して伝わってきました。（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう) 第49号

2018年8月21日 登録

<http://p.booklog.jp/book/123147>

編集：風狂の会（担当：高村 昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123147>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト